

総合教育センター
学生向け情報誌

クレードル 25号

CRADLE

Center for Research And Development of
Liberal arts Education
25th issue

4年振り「森に生きる」の原点 川上村へ



森に行こう！ p.2

竹村 景生(総合教育センター)

時給、上がってほしいよね

私の時給はなぜ安い？ 階級概念を再導入する p.3

箱田 徹(総合教育センター)

これでいいのだ

心の健康法 20

『不器用』でいきましょう。 p.4

仲 淳(総合教育センター)

CRADLE(クレードル) 第25号 2024年1月発行

発行者 上田 喜彦 天理大学 全学教育推進機構

編集 仲 淳 杉本 めぐみ

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050 電話 0743-63-7092 (内線) 6111

印刷 株式会社 春日

森に行こう！

総合教育センター 竹村 景生

森に行こう！森に入ると五感がひらく。森での体験は、いろんなことをあなたに教えてくれる。私たちは、大切なことのほんの一部しか知らない。あまりに私たちは森について知らないでいる。それはきっと、私たちの日常から森が消えたからだろう。現代



社会は、本当に大切なことから私たちを遠ざけ、目隠ししているようだ。

植林された森は放置され、今日暗い森となりひとも動物も入らない。間伐され手入れされた森は、様々ないのちを育み受け入れる。森が生きてきた歴史があり、森に生きてきた歴史がある。「森に生きる」の授業は、知ってしまった責任を自分はどう生

きるのか？を問い続けていく。

奈良の川上村「天理大学用木の森」で木を切りました。木を切った場所は足を踏み外したら下に落ちていくような場所でした。とても難しく危ない作業でした。そして、とても木が重く、長いものだと分かりました。自分が思ったより木の年齢があったため驚きました。(山本海人)



山を管理できる人が減少していることと、高齢化の問題を実感しました。山は放置しておくとも土砂災害をもたらしてしまう可能性があります。川上村では綺麗な水を海まで流す宣言をしていることを知りました。そのことを知り、より一層、水の源である森を大切にしようと思いました。(和田恵歩)

ナタやノコギリの使い方は、やる度に上達するのでやっていて楽しかったです。また、みんなで協力して木を倒すことができたので楽しかったです。今まで、森について知識も全然なかったし、森と関わる機会もあまりなかったので、この森に生きるの授業を通して森の生態系、森の現状についても知れたのでとてもいい経験が出来ました。(川本優太)



山に入る前に、この山にはヒルが沢山いると聞いていたので足元を探していた。すると前を歩いている人の足元にヒルが上って行っている所を見つけて驚いた。今までヒルを見たことがなかったので少し嬉しかった。(大門昌平)

私の時給はなぜ安い？

階級概念を再導入する

総合教育センター 箱田 徹

担当する授業のいくつかで「労働」について述べる機会を得てきた。私はそのたびごとに、賃金決定の社会的側面を強調してきた。賃金は使用者と労働者の契約によって決定される。たしかに。ただ、それは法的な取り決めとしてそう定義されているからではない。なぜ、その金額で決定されるのかは、個々の契約が結ばれる社会的、つまり全体的な背景を考慮することによってはじめて説明される。

詳しく話すと長くなりがちな性分なのはわかっているので、端的にこの問題提起する。「学生の賃金が低いのは、学生だからだ。女性の賃金が低いのも女性だからだし、外国人労働者の賃金が低いのも外国人だからだ。これは属性による賃金差別である。その意味で、学生と女性と外国人労働者は似た立場にある」。こうして図式化するねらいは、現代社会を分析する枠組みとして「階級」という視点を導入することにある。いまふうにいえば「インターセクショナリティ」（交差性）へのアプローチのひとつであるかもしれない。

外国人や女性が「階級」とは、経済中心主義だと眉をひそめる向きもあるだろう。実際、受講している学生から、この授業ではカネの話ばかりする、というコメントをもらったことも一度ではない。しかし、まったく同じ労働をしているとしても、男性よりも女性のほうが、また「日本人」よりも「外国人」のほうが低いという、世界のどこでも変わらない現実を、この属性による差別という図式は端的に説明できてしまう。加えていうなら、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、先住性、障害といった要素にかかわる運動は、そうした「属性」による差別と抑圧を争点にしてきた歴史を持つ点で共通してきた。カネの話はインターセクショナルな関心事のひとつとなることは間違いない。

2024年の日本に目を転じよう。「中高年仕様」になったメディアと中央政治は「八掛け社会」に対応せよとかまびすしい。沈没しそうな日本資本主義と日本国から上がりをかすめることに長けた経済界はもとより、定年が視野に入ったバブル世代もまた、年少世代と持たざる者の自己責任を唱え、気候崩壊から人口減少まで、あらゆる問題をことごとく放置して逃げ切りを図るのかと、「低成長の三〇年」を生きてきた「就職氷河期」世代としては呆れるばかりだ。とはいえ、そのような「世代論」に棹さすつもりは毛頭ない。かつての「団塊の世代」にしても、「新中間層」にしても、現代における「身を切る改革」にしても、経済不平等抜き世代論や「既得権益」論を説く人びとは、新保守主義や新自由主義と相性ぴったりだからだ。では、年代的な輪切りではないかたちで、社会を読み解くための別の筋を通すにはどうすればよいのか？ そのことを考えるとき、階級概念の有効性は衰えていないように思えてならない。ただし、その有効性は、社会的な決定に対する社会的な異議申し立てがいかに起きるか、新しい社会のビジョンがどう描かれるのかにこそ、かかっている。

こころの健康法 20

『不器用』でいきましょう。

総合教育センター 仲 淳

このところ毎日、テレビやSNSでは、野球のスーパースター大谷翔平選手の話で持ちきりですね。性格も温厚で、仲間思いで、否の打ちどころなしという感じで、同じ人間とは思えない、と感嘆してしまったりもしますよね。。

でも 2023 年のデータを見てみると、打率は 0.304 で、10 打席のうち 7 回はアウトになっていて、ピッチャーとしては、ホームランも打たれていますし、ファールボールもデッドボールもあって、暴投もあって、なんですよ。ケガでこれまでなんども手術もされていますし。

つまり、ピカピカ輝いていて、パーフェクトに見える大谷選手なのですが、いろんなミスやトラブルがあって、それを乗り越えての活躍、ということになるわけですね。

人間だれしも、かっこよく、スマートに、イケてる感じでいきたいものです。

でも残念ながらわたしたちは、いろんな間違いをしてしまいますし、わからないことやできないこともありますし、思わぬところでけつまづいてしまって、かっこ悪いこと極まりない、ということもやらかしてしまうことがあります。

そんなことなければいいのに、と思うわけなのですが、そういうことをしながらしか生きられない。それがわたしたちなのではないでしょうか？

不器用に、地道に、迷ったり、引き返したり、ときどきやけになってしまったりしながら、それでもまた思い直して、自分のできることをチビチビ、コツコツと。わたしたちが生きることができるのは、わたしたち自身の人生だけなのです。

唯一無二の、「不器用だけれど、日々少しずつ成長していける」自分自身を愛しましょう！



編集後記 みなさんお待ちいたしました。

今号は、なんやかんやで年明けの発行となりましたw
原稿を待つ間は、まだかまだかとやきもきしたけれど、
出てきた原稿を読んで、「あ〜待っててよかった。」と思いました。
次号は初夏ごろに発行したいです。笑(杉)